

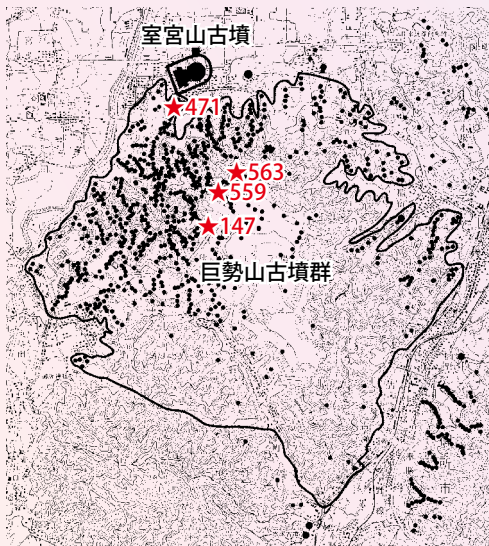


図1 室宮山古墳と巨勢山古墳群
(★印は巨勢山古墳群中の前方後円墳)

巨勢山古墳群には4基の前方後円墳が知られています(図1)。いずれも30～40m級で、うち3基については発掘調査によって副葬品内容まで分かっています(表1)。

意外だったのは丘陵最高所にある563号墳(図2)の状況です。優れた立地から、室宮山古墳の5世紀前葉に近い時期に築

ふるさと御所 文化財探訪

其の三十九

古墳時代(27)
葛城県の成立
巨勢山古墳群の
性格④

文化財課

☎60-1608

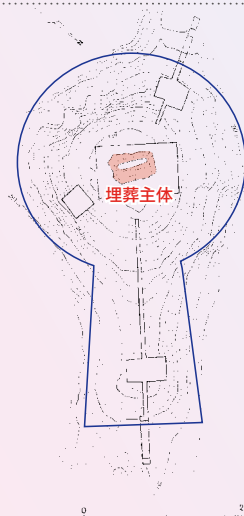
古墳名	位置	墳長	築造期	埋葬主体	出土遺物
巨勢山147号墳	丘陵南斜面	32m	6世紀初頭	主体部1 木棺直葬 主体部2 木棺直葬	[棺内] 銀製指輪2、短刀1、 刀子3、鉄鏃約5、[棺上] 鉄鎌2 [乱掘] 蕨手刀子、鉄鎌片、 須恵器片
巨勢山471号墳	丘陵北西端	41m	5世紀後葉	木棺直葬	[乱掘] 須恵器片
巨勢山559号墳	丘陵最高所	34m	不詳	不詳	不詳
巨勢山563号墳	丘陵最高所	46m	6世紀中葉	木棺直葬	[棺内] 鉄鏃1、ガラス玉約10、 [墓壙内] 須恵器片、土師器片

表1 巨勢山古墳群の前方後円墳 ※稲宿ヒガンド古墳(巨勢山707号墳)を除く

造され、おそらく埋葬主体も竪穴式石室か粘土槨であろうと推測して調査に入ったのですが、意外なことに築造期は6世紀中葉まで下り、埋葬主体は木棺直葬で、しかも副葬品が驚くほど少なかったのです。

そういう目で見れば、なるほど残る2基の前方後円墳である147号墳・471号墳にも同様のことが言えます。

図2 巨勢山563号墳の墳丘測量図



埋葬主体についていえば、少なくとも147号墳と563号墳は本来であれば横穴式石室を埋葬主体とする時期ですが、いずれも木棺直葬という最も簡易な埋葬法を採用していました。副葬品についても前号・前々号で取り上げた巨勢山古墳群の横穴式石室墳では、きらびやかな金銅装に飾られた馬具が出土していることを想起すれば、巨勢山古墳群における前方後円墳の副葬品内容はむしろ貧弱であるとさえ言えるでしょう。

そして巨勢山古墳群の中で、最古の前方後円墳は5世紀後葉の471号墳ということになります。この5世紀後葉という時期が8月号・9月号で述べた円大(ついでに葛城本)宗家の滅亡の時期に合致することは偶然とは思えません。前方後円墳という墳形は身分の高さ、埋葬施設や副葬品内容の貧弱さは勢力の弱さを示すと考えられますから、巨勢山古墳群の前方後円墳の被葬者像としては、衰退後の葛城氏の残党、というイメージがしっくり来ます。

だとすれば白石太一郎さんの理解、つまり巨勢山古墳群が室宮山古墳の被葬者、葛城襲津彦を共通の祖先とみなす擬姓的同族

集団関係によって成り立っている、との考え方は成り立たないのではないかと、というのが私の意見です。いかに実際の血縁関係の有無は必ずしも関係ない擬姓的同族集団関係とはいえ、前方後円墳の被葬者はその頂点に立つべき人物だからですが、それでは埋葬主体や副葬品内容の貧弱さは説明できません。巨勢山古墳群が総数700基という全国最大の群集墳となったのはなぜか。それには別の理由が考えられなければなりません。

【参考文献】拙著『古墳時代の王権と軍事』

2006年、学生社

(文責 藤田和尊)



2012.

1



図3 巨勢山563号墳の埋葬主体
(南東から)